

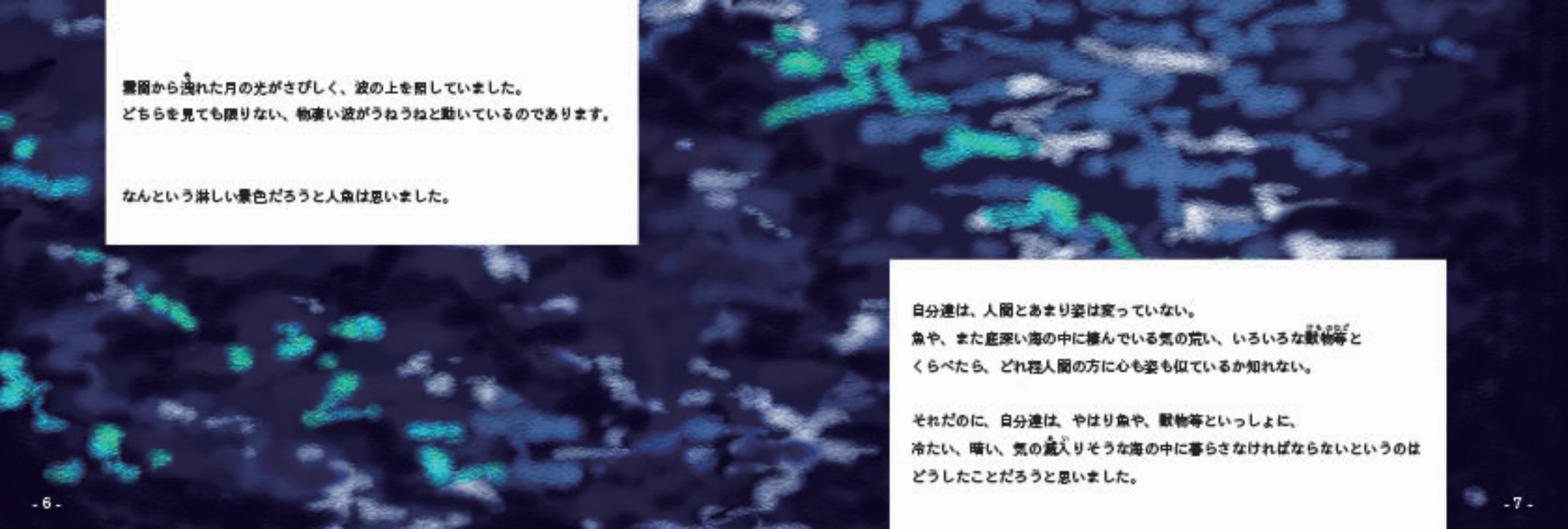
赤い蠟燭と人魚

著 小川未明



—
人魚は、南の方の海にばかり棲んでいるわけではありません。
北の海にも棲んでいたのです。

北方の海の色は、青うございました。
ある時、岩の上に、女の人魚があがって、あたりの景色を眺めながら休んでいました。

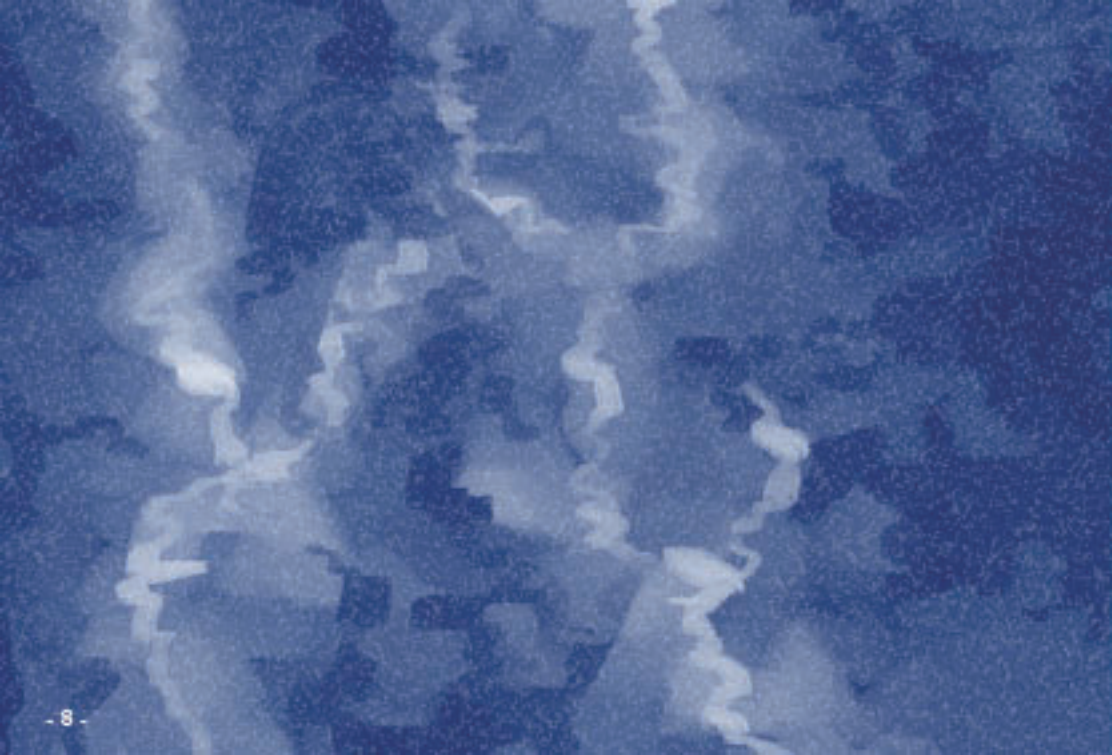


雲間から洩れた月の光がさびしく、波の上を照していました。
どちらを見ても限りない、物凄（ものご）い波がうねうねと動いているのであります。

なんという淋しい景色だろうと人魚は思いました。

自分達は、人間とあまり姿は変わっていない。
魚や、また底深い海の中に棲んでいる気の荒い、いろいろな獣物等（けものども）とくらべたら、どれ程人間の方に心も姿も似ているか知れない。

それなのに、自分達は、やはり魚や、獣物等といっしょに、
冷たい、暗い、気の滅入り（めしり）そうな海の中に暮らさなければならないというのはどうしたことだろうと思いました。



長い年月の間、話をする相手もなく、いつも明るい海の面を憶がれて暮らして来たことを思いますと、人魚はたまらなかったのであります。

そして、月の明るく照らす晩に、海の面に浮んで岩の上に休んでいろいろな空想に耽^{ふける}るのが常でありました。



「人間の住んでいる町は、美しいということだ。

人間は、魚よりも

また獣物^{けものもの}よりも人情があってやさしいと聞いている。

私達は、魚や獣物の中に住んでいるが、もっと人間の方に
近いのだから、人間の中に入って暮されないことはないだろう」
と、人魚は考えたのであります。

その人魚は女でありました。

そして妊娠^{てんご}でありました。

私達は、もう長い間、この淋しい、話をするものもない、

北の青い海の中で暮らして来たのだから、

もはや、明るい、暖かな国は望まないけれど、これから

産れる子供に、こんな悲しい、頼りない思いを

せめてもさせたくないものだ。

子供から別れて、独りさびしく海の中に暮らすということは、
この上もない悲しいことだけれど、子供が何処にいても、仕合せに
暮らしてくれたなら、私の喜びは、それにましたことはない。

人間は、この世界の中で一番やさしいものだと思っている。
そして可哀そうな者や頼りない者は決していじめたり、苦しめたり
することはないと思っている。



一旦手附けたなら、決して、それを捨てないとも聞いている。

辛い、私達は、みんなよく顔が人間に似ているばかりでなく、胸から上は全部人間そのままなのであるから——魚や獣物の世界でさえ、暮らされるところを見れば——その世界で暮らされないことはない。

一度、人間が手に取り上げて育ててくれたら、決して無慈悲に捨てることもあるまいと思われる。

人魚は、そう思ったのでありました。



せめて、自分の子供だけは、賑やかな、明るい、美しい町で育てて大きくしたいと
いう情から、女の人魚は、子供を陸の上に座み落そうとしたのであります。

そうすれば、自分は、もう二たび我子の顔を見ることは出来ないが、子供は
人間の仲間入りをして、幸福に生活をするであろうと思ったからであります。



透か、彼方^{あそこ}には、海岸の小高い山にある神社^{こまじ}の燈火が
ちらちらと波間に見えていました。

ある夜、女の人魚は、子供を産み落すために
冷たい暗い波の間に泳いで、陸の方に向って近づいて来ました。

二

海岸に小さな町がありました。

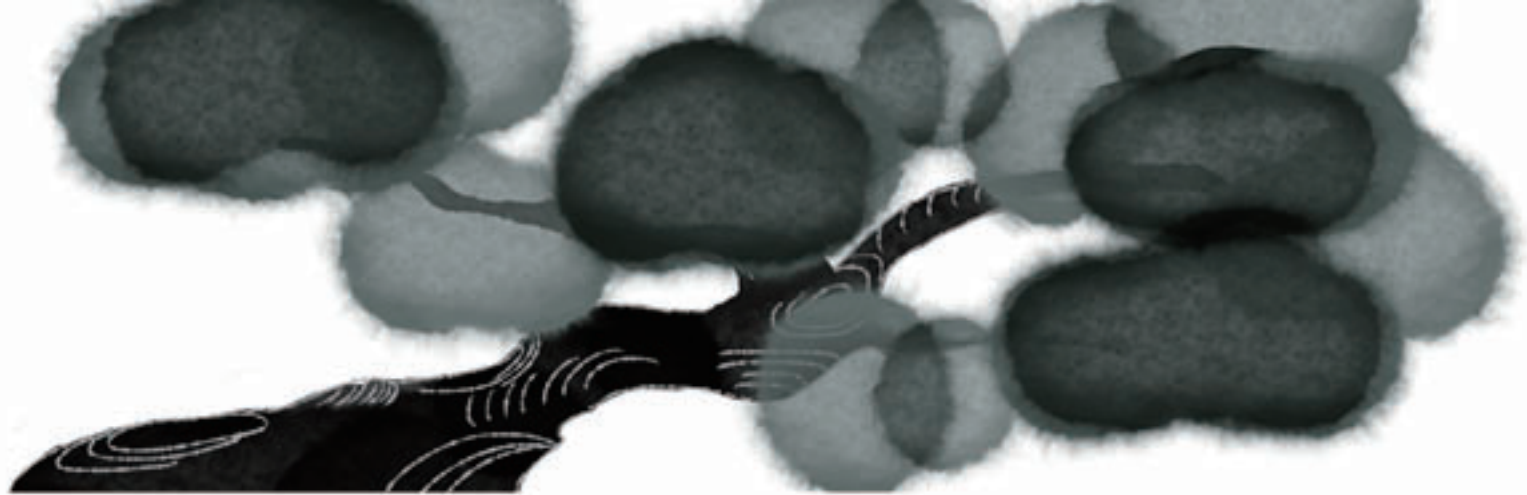
町にはいろいろな店がありましたが、お宮のある山の下に

小さな蛸焼たこやきを売っている店がありました。

その家には年よりの夫婦が住んでいました。お爺さんが蛸焼を造って、

お婆さんが店で売っていたのであります。

この町の人や、また附近の漁師がお宮へお詣りまいりをする時に、この店に立寄って蛸焼を買って山へ上りました。



山の上には、松の木が生えていました。その中にお宮がありました。
海の方から吹いて来る風が、松の梢に当って、昼も夜もごうごうと鳴っています。

そして、毎晩のように、そのお宮にあがった蜃蜃の火影が
ちらちらと揺めいていますが、遠い海の上から望まれたのであります。



ある夜のことであります。

お婆さんはお爺さんに向って、
「私達がこうして、暮らしているのもみんな神様のお蔭だ。
このお山にお宮がなかったら、蛸蛸が売れない。

私共は有がたいと思わなければなりません。
そう思ったついでに、お山へ上ってお詣りをして来ます」と、言いました。

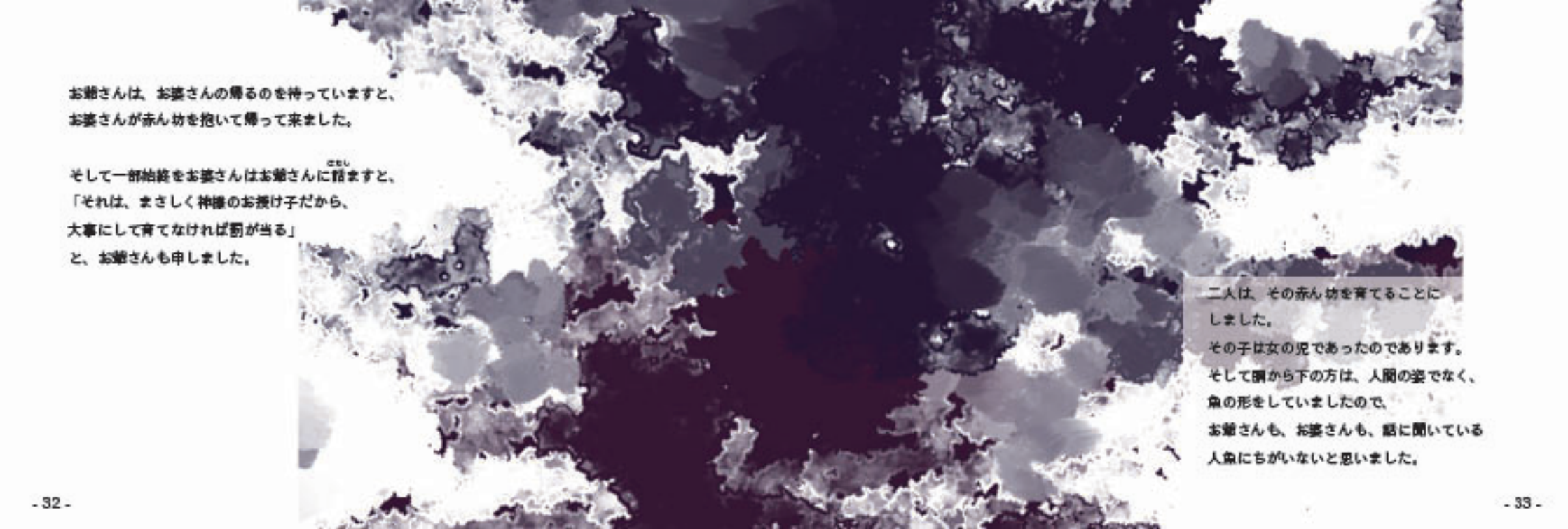
「ほんとうに、お前の言うとおりで。私も毎日、神様を有がたいと心でお礼を
申さない日はないが、つい用事にかまけて、たびたびお山へお詣りに行きもしない。

いいところへ気が付きなされた。私の分もよくお礼を申して来ておくれ」
と、お爺さんは答えました。

お婆さんは、とぼとぼと家を出かけました。月のいい晩で、
曇間のように外は明るかったのであります。
お宮へおまいりをして、お婆さんは山を降りて来ますと、
石段の下に赤ん坊が泣いていました。

「可哀そうに捨^{すて}児^こだが、誰がこんな処に捨てたのだろう。
それにしても不思議なことは、
おまいりの帰りに私の眼^{まなこ}に止^とめるといのは
何かの縁^{ゆかり}だろう。
このままに見^み捨^すて行^いって^は神様の罰^{ばち}が当^ある。
きっと神様が私連夫婦に子供の^こないのを知^しって、
お授^{さづ}けになったのだから
帰^{かえ}ってお婆さんと相談^{さんだん}をして育^{そだ}てましよう」

と、お婆さんは、心^{こころ}の中^{うち}で言^いって、
赤ん坊^{あかちゃん}を取り上げると、
「おお可哀そうに、可哀そうに」と、
言^いって、家^{いへ}へ抱^{かか}いて帰^{かえ}りました。



お爺さんは、お婆さんの帰るのを待っていますと、
お婆さんが赤ん坊を抱いて帰って来ました。

そして一部始終をお婆さんはお爺さん^{おや}に話すと、
「それは、まさしく神様のお授け子だから、
大事にして育てなければ罰^{ばち}が当る」
と、お爺さんも申しました。

二人は、その赤ん坊を育てることに
しました。

その子は女の児であったのであります。
そして胸から下の方は、人間の姿でなく、
魚の形をしていましたので、
お爺さんも、お婆さんも、話に聞いている
人魚にちがいないと思いました。

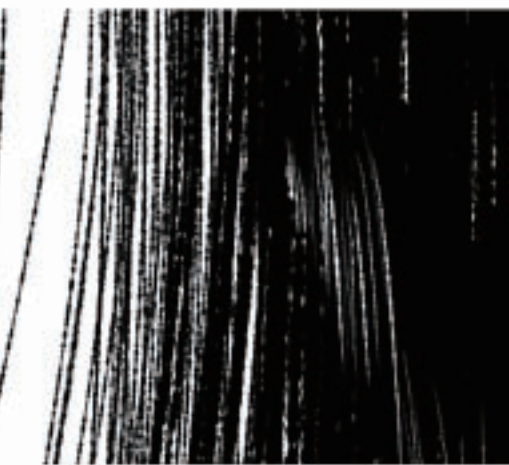
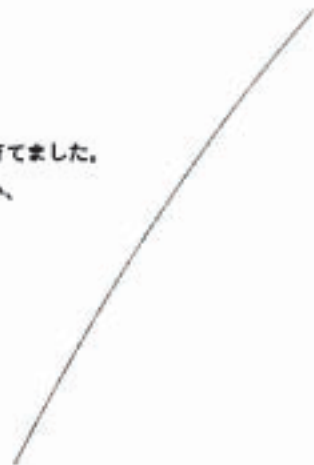
「これは、人間の子じゃあないが……」

と、お爺さんは、赤ん坊を見て頭を傾けました。

「私もそう思います。しかし人間の子でなくても、なんというやさしい、
可愛らしい顔の女の子でありましょう」と、お婆さんは言いました。

「いいとも何んでも構わない、神様のお
お助けなさった子供だから大事にして育てよう。
きっと大きくなったら、^{りこ}怜しい子になるにちがいない」
と、お爺さんも申しました。

その日から、二人は、その女の子を大事に育てました。
子供は、大きくなるにつれて黒眼^{くろがん}勝^{かた}な美しい、
髪^{かみ}の色^{いろ}のツヤツヤとした、
おとなしい伶俐^{れいれい}な子となりました。



三

娘は、大きくなりましたけれど、
姿が変わっているので恥かしがって顔を出しませんでした。
けれど一日その娘を見た人は、みんなびっくりするような美しい
舞臺でありましたから、中にはどうかして
その娘を見ようと思って、娼婦を買いに来た者もありました。

お爺さんや、お婆さんは、
「うちの娘は、内気で恥かしがりやだから、
人権の前には出ないのです」と、言っていました。
奥の岡でお爺さんは、せっせと娼婦を遊っていました。

娘は、自分の思い付きで、きつと絵を描いたら、みんなが喜んで蠟燭を
買うだろうと思いましたから、そのことをお爺さんに話すと、そんなら
お前の好きな絵をためしに書いて見るがいいと答えました。

娘は、赤い絵具で、白い蠟燭に、魚や、貝や、また海藻のようなものを
座れつき話にも習ったのでないが上手に描きました。
お爺さんは、それを見るとびっくりいたしました。

誰でも、その絵を見ると、蛸嶋がほしくなるように、
その絵には、不思議な力と美しさが籠こもっていたのであります。
「うまい筈だ、人間ではない人魚が描いたのだもの」と、
お爺さんは感嘆して、お婆さんと話合いました。

「絵を描いた蛸嶋をおくれ」と、言って、
朝から、晩まで子供や、大人がこの店頭みせごしらへ買いにきました。
果して、絵を描いた蛸嶋は、みんなに受けたのであります。





するとここに不思議な話がありました。

この絵を描いた蛸燭を山の上の
お宮にあげてその燃えさしを身に付けて、
海に出ると、どんな大暴風雨の日でも
決して船が翻覆したり
溺れて死ぬような災難がないということが、
いつからともなくみんなの口々に
噂となって上りました。



「海の神様を祭ったお宮様だもの、
綺麗な蛸燭をあげれば、
神様もお喜びなさるのにきまっている」
と、その町の人々は言いました。

蛸畑屋では、絵を描いた蛸畑が売れるので

お爺さんは、一生懸命に朝から晩まで蛸畑を造りますと、^{お婆}婆で娘は、
平の痛くなるのも我慢して赤い絵具で絵を描いたのであります。

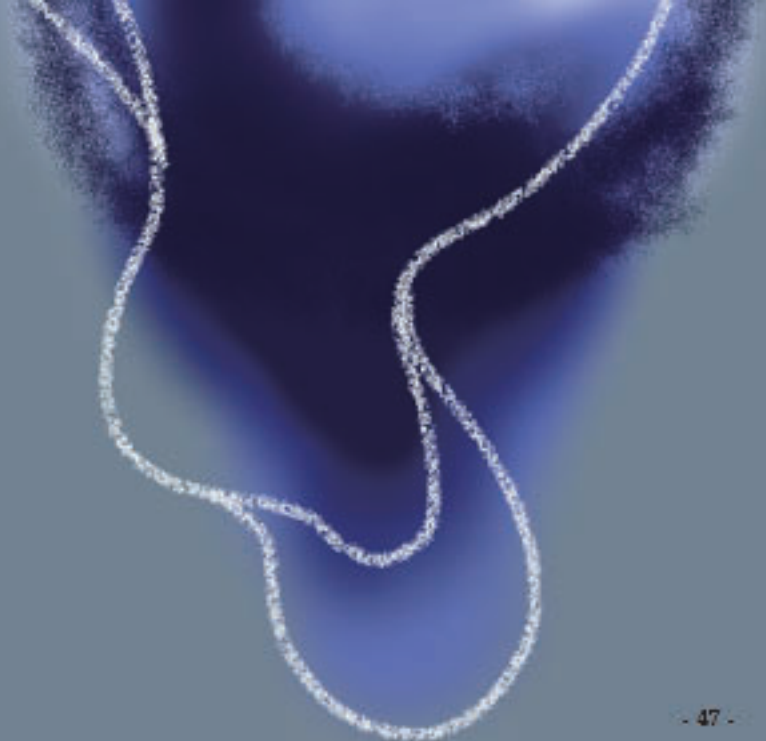
「こんな人間並でない自分をも、よく育て

可愛がって下さったご恩を忘れてはならない」と、

娘はやさしい心に感じて、

大きな黒い瞳をうるませたこともあります。

この話は遠くの村まで響きました。



遠方の船乗りやまた、漁師は、神様にあがった
絵を描いた蛸燭の燃えさしを
手に入れたいものだということで、わざわざ
遠い処をやって来ました。

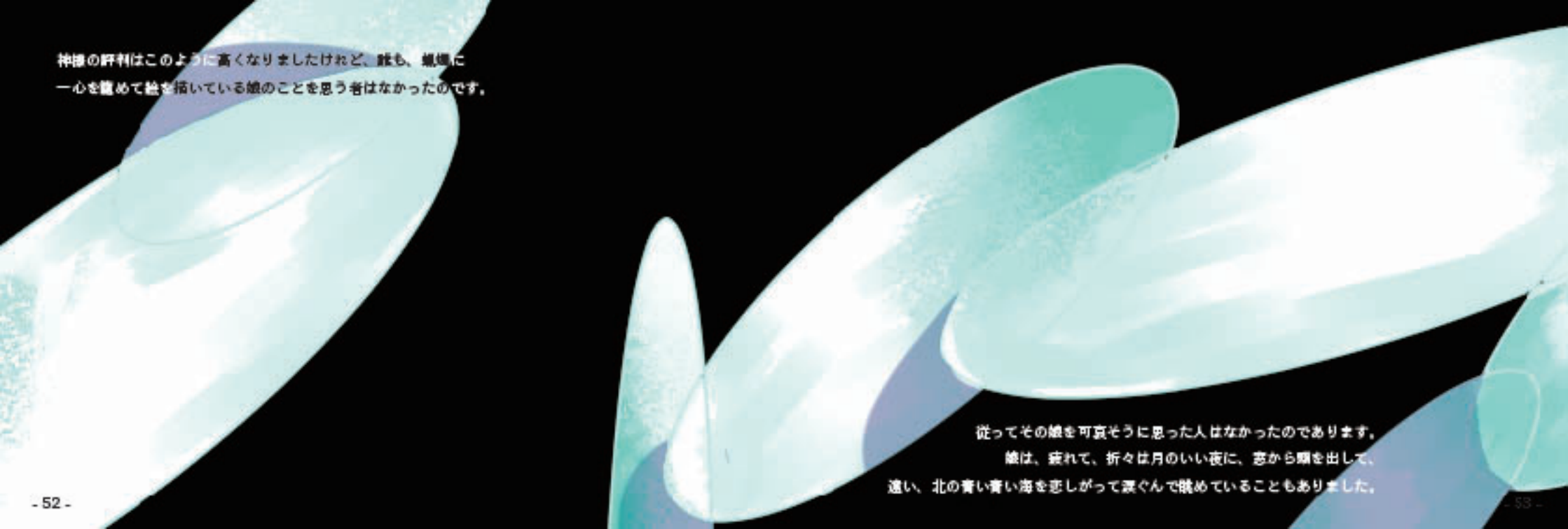


そして、蛸燭を買って、山に登り、お宮に参詣して、
蛸燭に火をつけて捧げ、その燃えて短くなるのを待って、
またそれを戴いて帰りました。

だから、夜となく、曇となく、山の上のお宮には、蠟燭の火の絶えたことはありません。
殊に、夜は美しく燈火の光が海の上からも望まれたのであります。



「ほんとうに有りがたい神様だ」と、いう評判は世間に立ちました。
それで、急にこの山が名高くなりました。



神様の評判はこうに高くなりましたけれど、誰も、娘に
一心を籠めて絵を描いている娘のことを思う者はなかったのです。

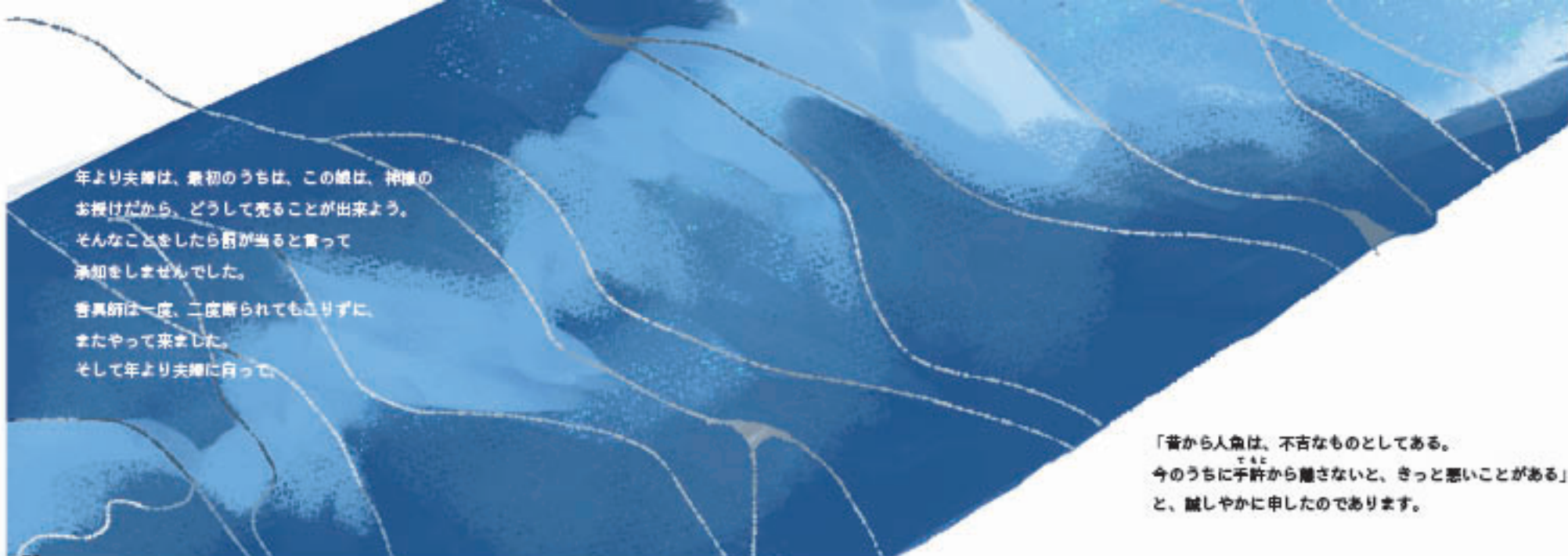
従ってその娘を可哀そうに思った人はなかったのであります。
娘は、疲れて、折々は月のいい夜に、窓から頭を出して、
遠い、北の青い青い海を恋しがって涙ぐんで眺めていることもありました。

四

ある時、南の方の国から、香^か真^し師が入って来ました。
何か北の国へ行って、珍しいものを探して、それをば南の方の国へ持って行って
金を儲けようというのであります。

香具師は、何処から聞き込んで来ましたか、
または、いつ娘の姿を見て、
ほんとうの人魚ではない、実に
世にも珍しい人魚であることを見抜きましたか、

ある日のこと
こっそりと年より夫婦の処へやって来て、
娘には分らないように、大金を出すから、その
人魚を売ってはくれないかと申したのであります。

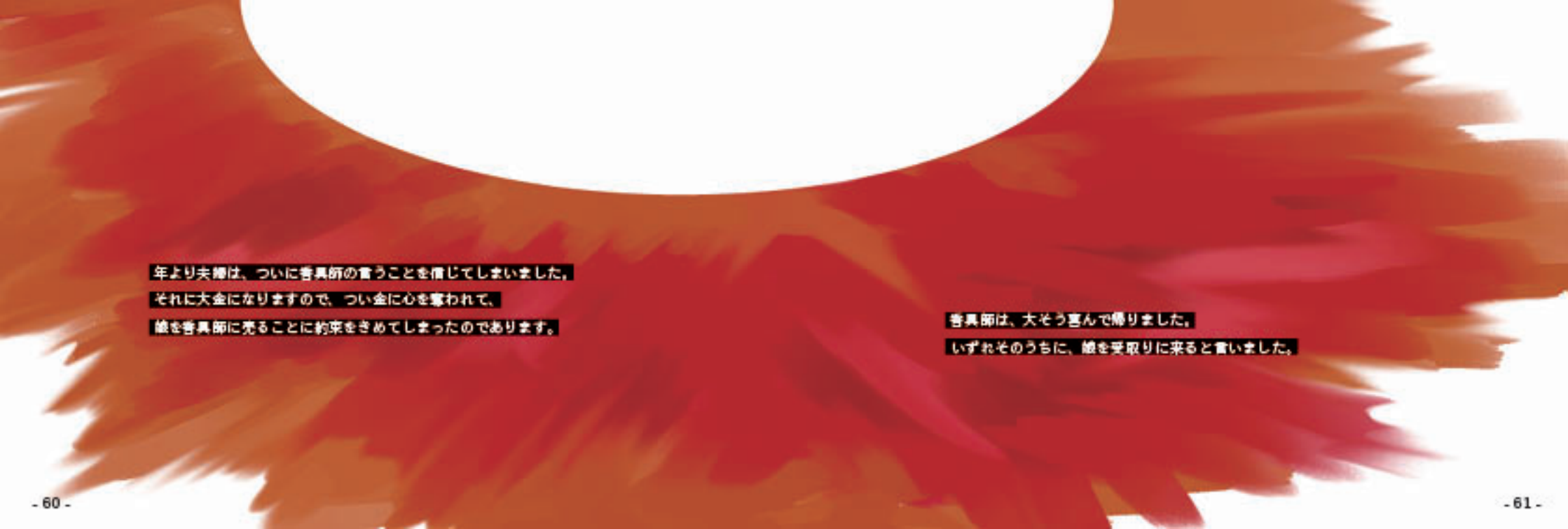


年より夫婦は、最初のうちは、この娘は、神様のお授けだから、どうして売ることが出来よう。そんなことをしたら罰が当ると言って承知をしませんでした。

香具師は一度、二度断られてもこりずに、またやって来ました。

そして年より夫婦に向って

「昔から人魚は、不吉なものとしてある。
今のうちに子許^{てもと}から離さないと、きっと悪いことがある」と、誠しやかに申したのであります。



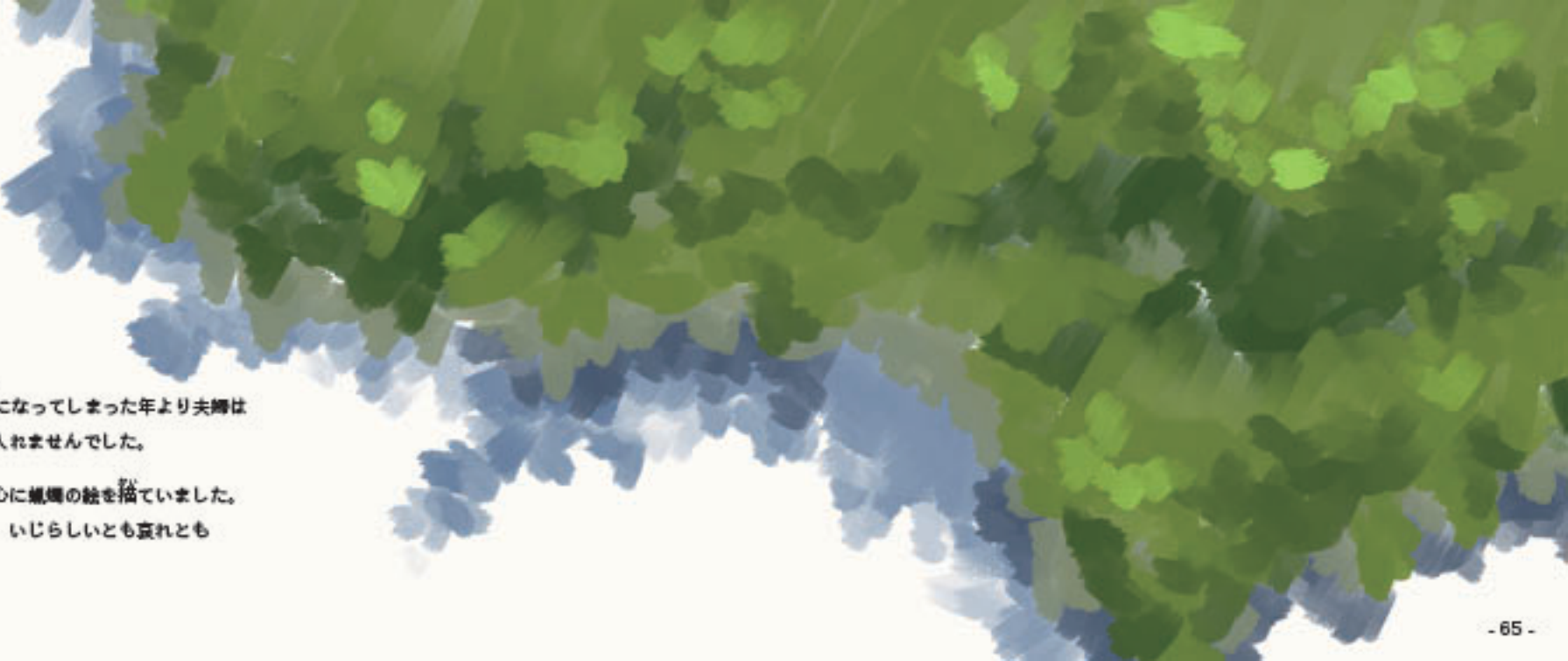
年より夫婦は、ついに香具師の言うことを信じてしまいました。
それに大金になりますので、つい金に心を奪われて、
娘を香具師に売ることによって約束をきめてしまったのであります。

香具師は、大そう喜んで帰りました。
いずれそのうちに、娘を受取りに来ると言いました。



この話を娘が知った時どんなに驚いたでありませんか。
内気な、やさしい娘は、この家を離れて幾百里も遠い
知らない熱い南の国に行くことを怖れました。
そして、泣いて、年より夫婦に願ったのであります。

「^{おれ}妻は、どんなにも働きますから、
どうぞ知らない南の国へ売られて行くことを
許して下さいまし」と、言いました。

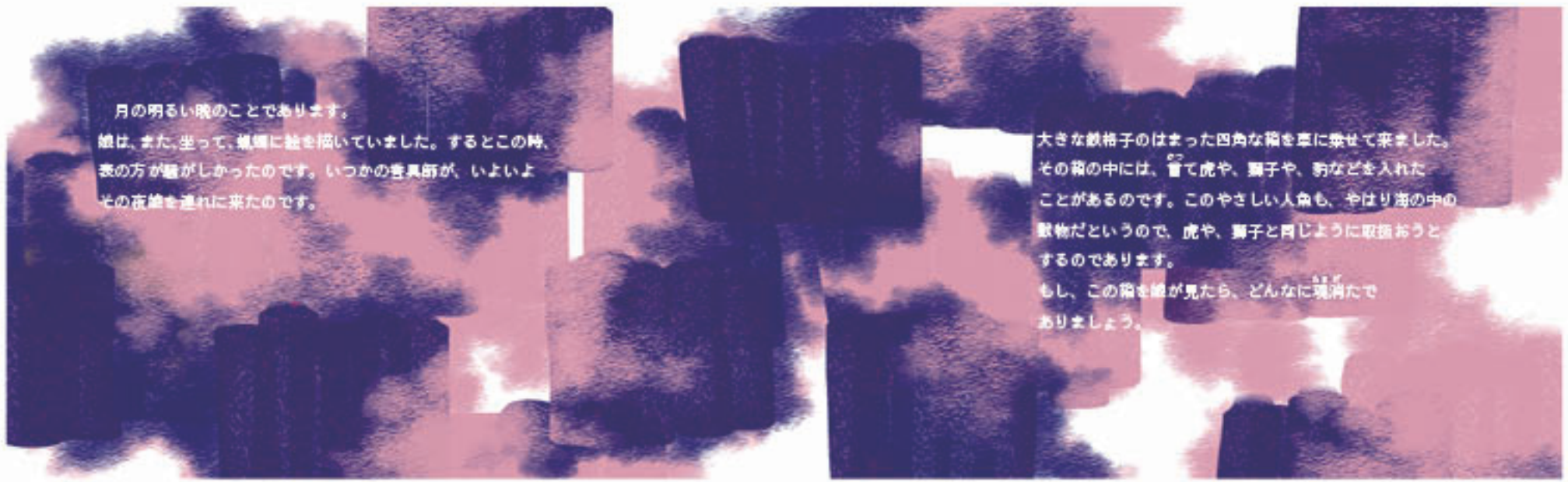


しかし、もはや、鬼のような心持になってしまった年より夫婦は
何といても娘の言うことを聞き入れませんでした。

娘は、空の裡に閉じこもって、一心に蛭螂の絵を描いていました。
しかし年より夫婦はそれを見ても、いじらしいとも哀れとも
思わなかったのであります。

娘は、独り波の音を聞きながら、身^みの行末^{ゆくすえ}を思うて恋しんでいました。

波の音を聞いていると、何となく遠くの方で、自分を呼んでいるものがあるような気がしましたので、窓から、外を覗いて見ました。けれど、ただ青い青い海の上に月の光りが、はてしなく照らしているばかりでありました。



月の明るい晩のことです。

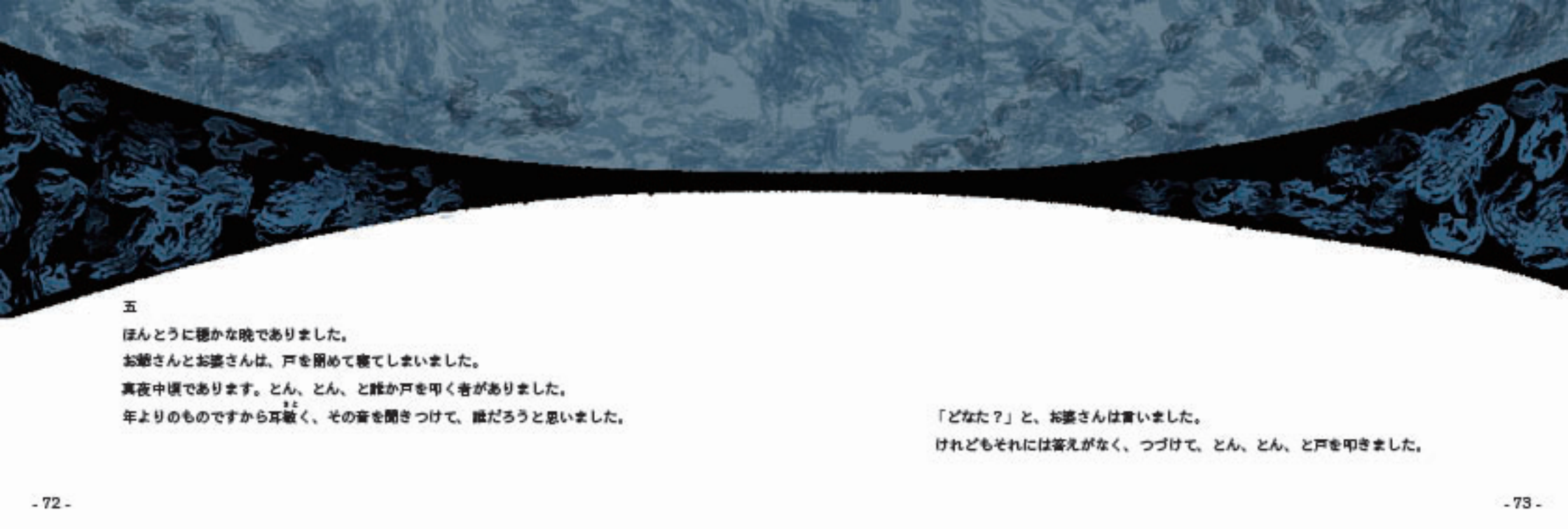
娘は、また、坐って、竈端に紐を括いていました。するとこの時、表の方が騒がしかったのです。いつかの雪具師が、いよいよその夜籠を連れに来たのです。

大きな鉄格子のはまった四角な箱を車に乗せて来ました。その箱の中には、曾て虎や、獅子や、豹などを入れたことがあるのです。このやさしい人魚も、やはり海の中の獣物だということで、虎や、獅子と同じように取扱おうとするのであります。

もし、この箱を娘が見たら、どんなに魂消たであらうでしょう。

娘は、それとも知らずに、下を向いて絵を描いていました。
其處へ、お爺さんとお婆さんが入って来て、
「さあ、お前は行くのだ」と、言って連れ出そうとしました。

娘は、手に持っている蠟燭に、せき立てられるので
絵を描くことが出来ずに、それをみんな赤く塗ってしまいました。
娘は、赤い蠟燭を自分の恋しい思い出の記念に、二三本残して
行ってしまったのです。



五

ほんとうに穏かな晩でありました。

お爺さんとお婆さんは、戸を閉めて寝てしまいました。

真夜中頃であります。とん、とん、と誰か戸を叩く者がありました。

年よりのものですから耳敏く、その音を聞きつけて、眠きとだろうと思いました。

「どなた？」と、お婆さんは言いました。

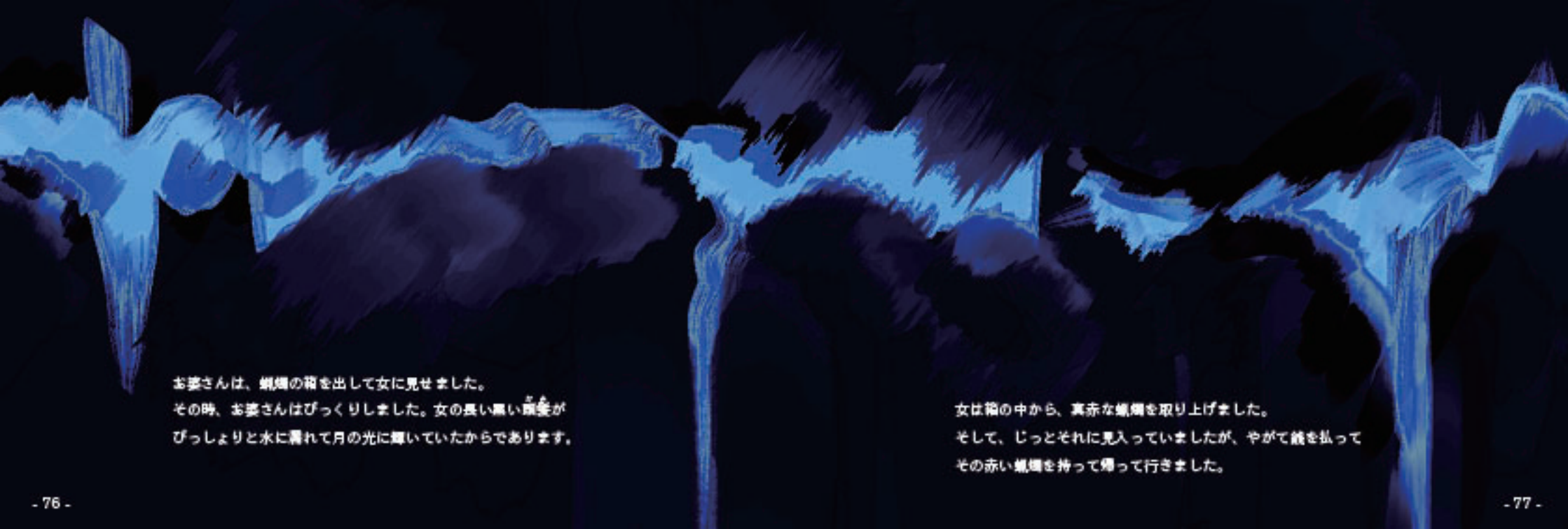
けれどもそれには答えがなく、つづけて、とん、とん、と戸を叩きました。

お婆さんは起きて来て、戸を細目にあけて外を覗きました。
すると、一人の色の白い女が戸口に立っていました。

女は蛾燭を買いに来たのです。

お婆さんは、少しでもお金が儲かるなら、決していやな願付^{ねがひ}をしませんでした。





お婆さんは、蛸燗の箱を出して女に見せました。

その時、お婆さんはびっくりしました。女の長い黒い髪が
びっしょりと水に濡れて月の光に輝いていたからです。

女は箱の中から、真赤な蛸燗を取り上げました。

そして、じっとそれに見入っていましたが、やがて銭を払って
その赤い蛸燗を持って帰って行きました。



お婆さんは、煙火^{ふで}のところで、よくその銭をしらべて見ますと、

それはお金ではなくて、貝殻^{かいがら}でありました。

お婆さんは、騙^{だま}されたと思うと怒って、家から飛び出して見ましたが、もはや、
その女の影は、どちらにも見えなかったのであります。



その夜のことであります。急に空の様相が変わって、
近頃になく大暴風雨となりました。ちょうど香具師が、彼を
襦袢の中に入れて、船に乗せて南の方の国へ行く途中、
沖合にあった頃であります。

「この大暴風雨では、とてもあの船は助かるまい」と、
お登さんと、お婆さんは、ふるふると震えながら話をしていました。

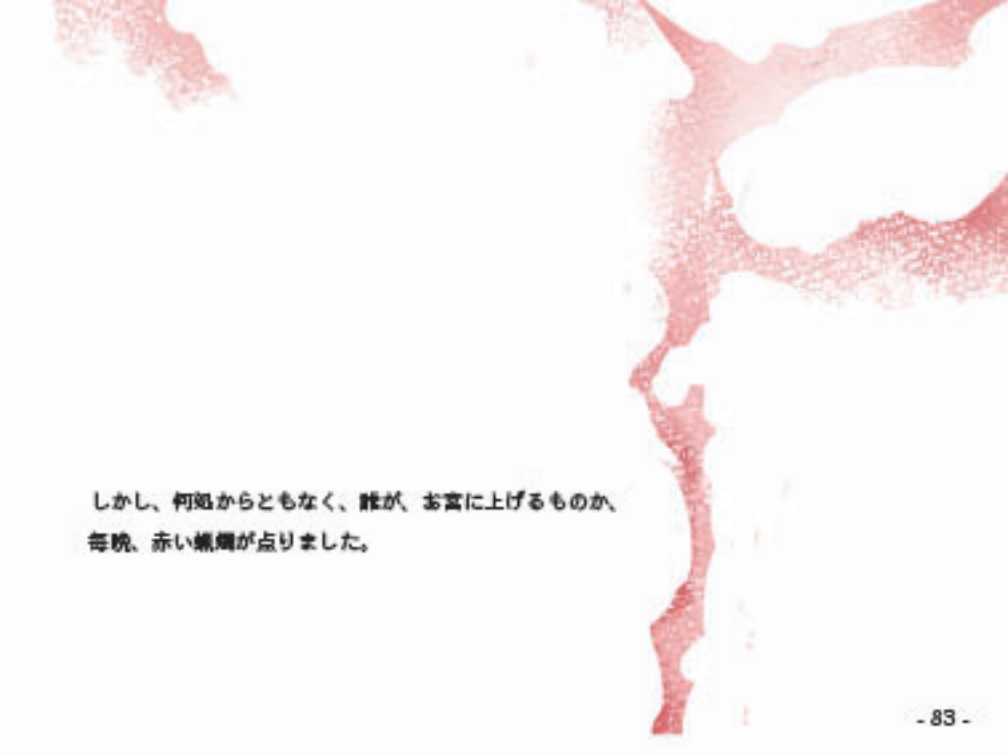
夜が明けると沖は真暗で物凄く景色でありました。
その夜、難船をした船は、数えきれない程でありました。



不思議なことに、赤い蠟燭が、山のお宮に点った晩は、
どんなに天気がよくても忽ち大あらしになりました。

それから、赤い蠟燭は、不吉ということになりました。

蠟燭屋の年より夫婦は、神様の罰が当たったのだといって、
それぎり蠟燭屋をやめてしまいました。



しかし、何処からともなく、誰が、お宮に上げるものか、
毎晩、赤い蠟燭が点りました。

昔は、このお宮にあがった絵の描いた蜃蜃の燃えさしを
持ってさえいれば、決して海の上では災難に罹らなかつたものが、
今度は、赤い蜃蜃を見ただけでも、その者はきっと災難に罹って、
海に溺れて死んだのであります。

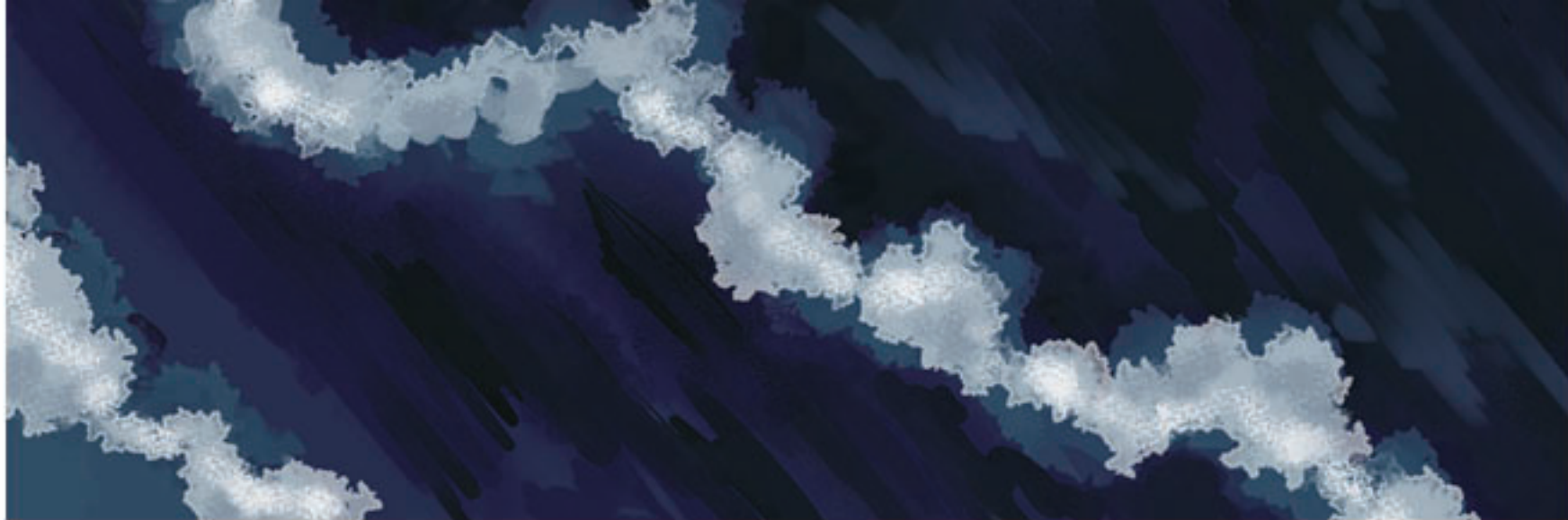




忽ち、この噂が世間に伝わると、もはや誰も、山の上の
お宮に参詣する者がなくなりました。
こうして、昔、あらたかであった神様は、今は、町の鬼門となってしまいました。

そして、こんなお宮が、この町にできればいいのにと
思^{おも}まぬものはなかったのであります。

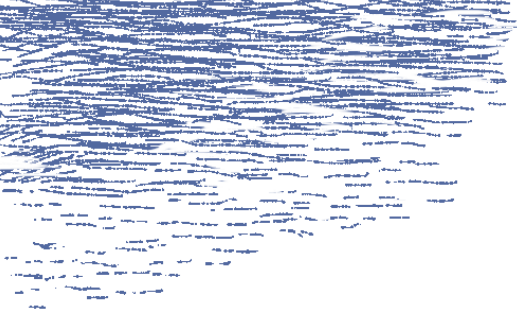
船乗りは、沖から、
お宮のある山を眺めて怖れました。
夜になると、北の海の上は永に物凄うございました。
はてしもなく、何方を見まわしても高い波がうねうねとうねっています。



そして、岩に砕けては、白い泡が立ち上っています。
月が雲間から流れて波の面を照らした時は、まことに気味悪うございました。

真暗な、星も見えない、雨の降る晩に、
波の上から、蠟燭の光りが、漂って、だんだん高く登って、
山の上のお宮をさして、ちらちらと動いて行くのを見た者があります。

幾年も経たずして、その下の町は亡びて、失ってしまいました。



底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」

ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成 20）年 8 月 10 日第 1 刷発行

2010（平成 22）年 5 月 25 日第 2 刷発行

底本の親本：「日本児童文学体系 5」ほるぷ出版

1977（昭和 52）年 11 月

初出：「東京朝日新聞」

1921（大正 10）年 2 月 16 日～ 20 日